

中年期夫婦関係研究の展望

—システムズ・アプローチの観点から—

臨床心理学コース 藪 垣 将

Review of the study of relationships in middle-years couple
—Focusing on the systems approach—

Sho YABUGAKI

Recently, the studies of relationships in middle-years couple are receiving increased attention from psychologists. In this article, the author selectively reviews some of the significant research that have been made toward understanding the relationships of middle-years couple, with the purpose of finding the task that need to be achieved in order to make an important advances in psychological knowledge. The author's thesis is following: In the study of relationships, researchers should adapt the systems perspective to their own research, and it is achieved by using fully worked-out methodological strategies and analytical techniques called "pairwise approach".

目 次

1. 中年期夫婦とは
 - A. 中年期夫婦の特徴
 - B. 二者関係としての夫婦関係
2. 中年期夫婦研究の展望
 - A. 研究の谷間——中年期夫婦関係研究
 - B. 国内の中年期夫婦関係研究の展望
 - C. まとめ
 - D. 中年期夫婦関係研究の課題
3. システムの視点を導入する
 - A. 様々な心理学研究法
 - B. ペアワイズ・アプローチ
 - C. まとめ

1. 中年期夫婦とは

目下、中年期夫婦を対象とした研究は心理学領域において、十分に蓄積されているとは言いがたい。中年期は様々な危機を迎える時期であると言うことが多く指摘されていることから、このコホートに焦点を当てることは極めて重要である。

中年期夫婦を取り上げる際には、次の三点をふまえた上で理解する必要がある。一つ目は、個人ライフサイクルとしての中年期である。二つ目は、家族ライフサイクルとしての中年期である。三つ目は、二者関係

としての夫婦関係である。

本稿ではまず、この点について詳述し、中年期夫婦関係研究を行う際にふまえるべきである基本的な視座を明確にする。次に、2000年以降に発表された国内の研究を概観し、これまでどのような研究が行われてきたのかについてまとめる。最後に、今後の課題として、システムの視点を導入する方法について論じる。

A. 中年期夫婦の特徴

夫婦関係経歴は、二つの個人の相互連関の中で作られている（長津, 2007）。一つ目の個人は、生理的・心理的・社会的に固有な歩みを刻む個人である。二つ目の個人は、家族という集団を形成し、親役割や妻役割を遂行するとともに、家族成員と相互作用しながら、家族の一員としての歩みを刻む個人である。そこで、中年期夫婦に焦点を当てる際には、個人ライフサイクルとしての中年期の特徴と、家族ライフサイクルとしての中年期の特徴をふまえておく必要がある。ここでは、これらについて簡単にまとめておく（より詳細には、長津（2007）や東原（2003）などを参照されたい）。

個人ライフサイクルとしての中年期は、人間の生涯全体を発達の視点から捉える視座が確立されつつあった1970年代以降、関心が向けられるようになった（岡本, 1994）。身体的特徴として、体力の衰えや成人病

罹患率の上昇身体感覚の変化などが挙げられる。また、心理的特徴として、時間的展望のせままりやアイデンティティの再構築などが挙げられる。さらに、社会的特徴としては、職業に対する意味づけの変容が挙げられる。

家族ライフサイクルとしての中年期には、親子関係として、子供が進学・就職・結婚などのために家を離れることによるエンpty・ネストの問題や子供の成長に伴う親役割の再調整の問題、自身の両親の介護問題がある。一方、夫婦関係として、前期には「夫は仕事、妻は仕事と家事」という新性別役割分業が顕著に現れ、後期には分化した夫婦の生活世界を高齢期に向けて統合し始める(長津, 2007)。

B. 二者関係としての夫婦関係

中年期夫婦を扱う際には、上述のような特徴をふまえることに加え、関係の視点をふまえておくことが大切である。何故なら、殆どの個人の行動は、個人の他者との関係の文脈において生起するからである。

夫婦関係は、個人の重要な他者との関係の一種として位置づけられる。そして、個人変数 X と個人の行動 Y の連関が、どのようにして形成され、維持され、変容するののかということには、その時点における個人にとって重要な他者との関係が大きく影響している(Reis, Collins, & Berscheid, 2000)。

このような理由から、中年期夫婦の理解を試みる際には、夫妻それぞれの個人変数を扱うと同時に、夫婦関係に注目する必要がある。さらに、個人変数 X_H (夫の個人変数 X)が個人変数 X_W (妻の個人変数 X)に与える影響や個人変数 X_H が個人変数 Y_W (妻の個人変数 Y)に及ぼす影響のように、夫妻間で及ぼしあう影響についても併せて検討しなければならない。

2. 中年期夫婦研究の展望

それでは、近年の国内における中年期夫婦関係研究の動向は、どのような様相なのだろうか。また、それらの研究から、どのようなことが明らかになったのだろうか。

A. 研究の谷間——中年期夫婦関係研究

まず、近年行われた中年期夫婦関係に焦点を当てた研究を抽出し、中年期夫婦関係研究の進捗についての考察を行う。

方法

論文データベースCiNiiを用いて、中年期夫婦を研究している論文を抽出した。抽出手続きとして、「中年期」のキーワードを用いて検索を行った。また、論文抽出の範囲を、2000年以降に発表されている論文に限定した。なお、シンポジウムの報告や紀要論文などは、査読の過程を経ていない場合が多いため、調査対象外とした。さらに、臨床実践に関する事例論文なども調査対象外とした。その結果、「家族心理学研究」「教育心理学研究」「社会心理学研究」「発達研究」「発達心理学研究」「家族社会学研究」「心理学研究」「パーソナリティ研究」「心理臨床学研究」の学術誌を調査対象とした。

調査時期は、2009年9月であった。

結果

上述の手続きを経て、17篇の論文を抽出し、本稿における概観の対象とした。

2000-2009年の間に17本以上の査読を経た論文が発表されており、紀要論文などを加えればさらにその数が増える。このことから、心理学領域における中年期を対象とした夫婦関係研究が少ないという状況が若干の改善を見せており、心理学者の関心が中年期に寄せられ始めていることが読み取れる。だが、研究数それ自体はまだまだ少なく、引き続き研究を蓄積する必要がある。

中年期を対象とした夫婦関係研究が少ない原因としては、中年期の問題が育児期や高齢期のそれと比べ見えにくいことや、中年期以外の家族ライフサイクル上の夫婦が抱える問題はインパクトが大きいため、そちらに研究者の関心が向けられてきたという事情が考えられる。

一例としては、次のような状況があるだろう。清水・磯田(1991)は、「個別化する私事化志向性」という概念を提唱している。これは、「夫婦であっても私は私でありたい」「配偶者の都合で自分を犠牲にするのはかなわない」というように、私事化が家族の中の個と個の問題に発展する状況を意味している。このような個別化が進みつつある社会的状況下では、空の巣症候群の問題のように夫妻の一方だけが抱える問題は、夫婦あるいは家族の問題としては捉えられず、個人の問題として捉えられることになるだろう。これに対し、育児期夫婦は、新生児の誕生に伴う親役割の獲得の問題や、夫婦関係の調整の問題など、夫婦が問題意識を共有する場合が多い。このように、進んできた

個別化の影響を受けて、中年期特有の問題は表面化しにくいという性質を有している。

一方で、少子化の原因として子育てと就業の困難性が指摘されていることや、幼児・児童虐待や育児不安の原因の一端が夫婦関係にあると指摘されていることなどから、研究者の関心は育児期における夫婦関係の解明に寄せられている（長津, 2007）状況が続いてきた。このように、中年期特有の問題の性質である表面化しにくさと、研究者の関心が他のステージの夫婦関係に向けられてきたことが相俟って、研究数が少ない状況が生み出されてきたと考えられる。

ただし、近年、中年期夫婦に関心を寄せる研究者が増え始めていることや、中年期夫婦特有の問題とその心理的発達上の重要さなどが指摘され始めていることから、今後、研究数の増加が期待できるだろう。

B. 国内の中年期夫婦関係研究の展望

さて、先に抽出した17篇の論文からもたらされた知見についてまとめ、整理を行なう。研究はその内容から、心理的特徴に関する研究、社会的・文化的背景に関する研究、情緒的關係に関する研究、コミュニケーションに関する研究、母子関係に関する研究の5つに分け、それぞれ知見をまとめた。

心理的特徴に関する研究

心理的特徴に関する研究としては、同一性・アイデンティティに関する研究が4篇、自己概念に関する研究が3篇、時間的展望に関する研究が1篇見られた。

まず初めに、同一性・アイデンティティに関する研究を取り上げる。

森川（2000）は、中年期の子供のいない女性3名の事例研究を行い、何が中年期における同一性の地位の違いに関わっているのかを考察した。その結果、青年期は中年期の危機をどのように過ごすかに影響を与えていることを明らかにした。

また、子供がいない中年期女性が、様々な同一性成熟の可能性を持っていることを示唆した。

清水（2004）は、41-60歳の中年期女性1041名を対象に、子の巣立ちと母親のアイデンティティとの関連を横断的に検討した。その結果、母親が子の巣立ちを主観的に認識することと関連して、母親のアイデンティティは発達に向かうことが確認された。特に、第一子の巣立ちを感じ始める時期がその発達の起点であり、その段階において気軽に相談出来る友人の存在はアイデンティティの拡散を抑制する働きがあった。ま

た、母親として子の巣立ちに積極・肯定的な態度を持つことはアイデンティティ混乱と負の関係にあることが、子の巣立ちを認めつつも密着・献身的な態度を持つことはアイデンティティ混乱と正の関係にあることが示された。さらに、職業との関連において、フルタイム勤務の人は子の巣立ちに伴って達成方向のアイデンティティ・ステータスへと分布が偏るのに対し、専業主婦では一人目の巣立ちが完了した段階でアイデンティティ拡散に偏ったことが示された。

清水（2008）は、青年期用開発されたアイデンティティ・ステータスを中年期に用いた研究の成果をまとめ、その限界と論点を整理し、今後の中年期研究の展望を論じた。その結果、中年期は青年期の単なる繰り返しではなく独自のプロセスや内容がある知見が提出され始めていることを明らかにした。また、アイデンティティ再構成の過程をメカニズムまで理解しようとする中年期研究と、中年期特有のアイデンティティ課題を定義しようとする研究を取り上げ、それらが示唆するアイデンティティ・ステータスの方法上の限界を示した。さらに、後者の研究への示唆として、アイデンティティ再構成という発達観からの脱却と、対人関係性や状況の変化に応じられるアイデンティティ概念の新しい定義の必要性を指摘した。

廣田（2009）は、30代から50代の男性698名を対象とし、成人期男性のアイデンティティの捉えなおしの様相とその規定要因について検討を行った。その結果、捉えなおしが中年期に限定される経験では無いこと、捉えなおしを経験しない者も居ることが見出された。さらに、規定要因についての検討から、過去の捉えなおし経験の有無、老いや社会的限界の認識、職務へコミット出来ないことが共通の規定要因であること、アイデンティティの捉えなおしの意味は年代によって異なることを明らかにした。

次に、自己概念に関する研究を取り上げる。

丸島（2000）は、「生殖性」の発達と自己概念の関連性について、一般成人390名および成人患者41名を対象とした調査研究を行った。その結果、中年期の自己概念の因子構造として、「達成因子」「適応因子」「社会性因子」の3つを抽出した。さらに、生殖性の発達に影響を及ぼす要因の検討から、「達成」「適応」の自己概念の構造は、中年期の心理社会的発達と有意に関連していることを明らかにした。

若本（2004）は、30-65歳の中年期男女1006名を対象に、中年期の多次元自己概念における発達の特徴について検討を行った。その結果、中年期の多面的自

己をめぐる自己概念は4領域から構成されること、中年期の自己概念には発達差と性差があることを見出した。さらに、多面的自己の各領域に対する関心と評価の交互作用によって中年期の自己概念の特徴を検討し、自尊感情との関連において交互作用が有意となる自己の領域は、中年期に特有とされる変化の端緒にあり、内省・葛藤が喚起されやすいものであることを示した。

若本(2007)は、中高年期成人2026名を対象に、自己評価と自尊感情との関連、自己評価の5下位領域間の関連、それらの関連における年齢段階差を検討した。その結果、自尊感情との関連を検討した重回帰分析から、中高年期全体を通して内的自己が、中年前期・ポスト中年期ではさらに社会的自己・生活的自己(経済面)が有意な説明変数であることが明らかになった。さらに、領域間の相関分析から各領域に対する自己評価は独立して付与されること、領域間の関連における年齢段階差の検討から男性は生活的自己の経済面、女性では経済面・健康面と他の自己領域との関連において有意差が認められることなど、自己評価の構造面の特徴を明らかにした。

最後に、時間的展望に関する研究を取り上げる。

日潟・岡本(2008)は、中年期を対象とし、時間的展望の様相を量的・質的の両側面から捉えた。その結果、40歳代は未来志向であり、50歳代に現在志向への転換が見られることが示された。また、精神的健康との関連では、40歳代では現在の充実感、50歳代では過去の受容と現在の充実感、60歳代では現在の充実感と未来への希望が精神的健康と関連することを示唆した。さらに質的な分析からは、中年期の身体的心理的変化の気づきや受容に伴って、40歳代では過去を土台として捉え、50歳代では未来を志向する中で過去の出来事に対する必然感が生じ、それに続く現在として現在の出来事にコミットし、60歳代では自己を受容し、それを表現する場としての未来を志向することが示された。

社会的・文化的背景に関する研究

社会的・文化的背景に関する研究は、3篇見られた。

難波(2000)は、中年期の女性7名に対し、個別の面接にてライフヒストリーを聞き取り、KJ法を参考にした質的分析を行った。その結果、中年期における心理的転換点が主として子育ての義務からの解放を感じた頃であることなどとして、インフォーマント達の生き方と発達のプロセスをまとめた。また、この

プロセスは、家庭と家族、家庭生活に支障をきたさない範囲の仕事、趣味・教養・地域活動を中心にして女性として成熟するという文化モデルを目標として生きてきたことを意味するとし、社会的・文化的背景に注目しながら考察を加えた。具体的には、インフォーマント達の発達のプロセスには私的な人間関係が大きく関わっているという特徴の指摘や、彼女らの人生における個性化のプロセスの立ち現れ方の考察などを行った。

永久・柏木(2001)は、中年期の母親130名を対象とし、その家族観と、母親の時間や心的エネルギーなどの資源の配分対象との関連を検討した。その結果、家族観は、母親自身を家族と一体の存在と捉える「一体感」と、家族とは独立の個人としての心理的領域を認める「個人領域」の2軸から構成されていることが明らかにされた。さらに、家族観と資源配分の関係から、女性の高学歴化と有職化は、家族に配分する資源を時間資源から心的エネルギー資源へと変化させ、母親が個人としての生き方により多くの時間資源を配分することを可能にしていることが示唆された。

また、近年では家族内部における個人化傾向が高くなっていることから、「個別化と統合」が夫婦関係研究の課題の一つとなっている。

井上(2001)は、「家族の中の孤独感」に注目し、その現状と要因の調査を行なった。また、孤独感と個人化の関係性について考察を加えた。その結果、孤独感は夫妻間に質的な差異が認められ、配偶者に対する孤独感は妻の方が高いこと、孤独感には配偶者に対する「不満足度」が強い影響を及ぼしていること、行動次元の個人化傾向は孤独感に影響しない一方で、意識次元では個人化しつつ孤独感も高まっている現状を明らかにした。

情緒的関係に関する研究

夫婦の情緒的関係を取り上げた研究は、2篇見られた。

平山(2002)は、中年期の妻を対象とし、情緒的ケアの夫婦間対称性を検討した。その結果、中年期の妻は、妻から夫への情緒的ケア遂行度は夫から妻への情緒的ケア遂行度より高く、夫婦が互いをケアしあう関係は非対称的である、と認知していることを明らかにした。さらに、妻が夫と同等に社会経済的資源へアクセス出来ることが夫婦の情緒的ケア関係に相互性・互恵性を保証する可能性を示唆した。また、夫婦間に対等で互恵的な情緒的交流があると認知している妻は、

家庭内ケアを行うことに起因する否定的な思いが低いことを見出した。

伊藤・相良・池田（2006）は、職業生活が夫婦関係満足度および主観的幸福感に及ぼす影響について検討した。その結果、妻に限り、仕事へのコミットメントが自身の夫婦関係満足度に影響すること、夫の仕事へのコミットメントが妻の夫婦関係満足度および主観的幸福感に影響を及ぼすこと、妻がパートタイムの場合に限り、妻の仕事へのコミットメントの影響を夫が大きく受けることなど、妻の就業形態と収入、夫の分業観によって、職業生活が夫婦関係と心理的健康に及ぼすスピルオーバー/クロスオーバーな影響が異なることを明らかにした。

コミュニケーション・パターンに関する研究

コミュニケーション・パターンに関する研究は、3篇見られた。

平山・柏木（2001）は、核家族世帯の中年期夫婦277組を対象に、夫婦間コミュニケーションの様態を検討した。その結果、夫婦間コミュニケーション態度は「威圧」「共感」「依存・接近」「無視・回避」の4次元から成ることを見出した。また、自己評定得点を用いて相手へのコミュニケーション態度を夫婦間で比較した結果、ポジティブなコミュニケーション態度は妻の方が有意に高く、ネガティブなコミュニケーション態度は夫の方が高いことを見出した。相手へのコミュニケーション態度のうち、夫に最も顕著なのは「威圧」、妻に最も顕著なのは「依存・接近」であった。さらに、相手へのコミュニケーション態度は夫婦それぞれの学歴水準や夫婦間の学歴差に関係しないこと、妻の経済的地位が高い程、夫は妻に対して共感的なコミュニケーション態度を取る傾向が明らかにされた。

平山・柏木（2004）は、夫婦間コミュニケーション態度をもとに夫婦のコミュニケーション・パターンの特徴を明らかにした。また、コミュニケーション・パターンの差をもたらす要因を、夫婦の経済生活および結婚観との関連で検討した。その結果、夫婦のコミュニケーション・パターンを、夫妻がポジティブな態度でコミュニケーションをしている「共感親和群」、平均的で中立的なコミュニケーションをしている「平均中立群」、双方がネガティブな態度でコミュニケーションをしている「威圧回避群」の3群に分類した。また、「共感親和群」「威圧回避群」における妻は夫に比べて夫婦関係満足度が低いこと、夫婦の経済生活がコミュニケーション・パターンの違いと関連するこ

と、片働き夫婦は「平均中立群」が多い一方で妻の年収が100万円を超える共働き夫婦は「共感親和群」が多いこと、夫婦のコミュニケーション・パターンと結婚観が関連することを見出した。

土倉（2005）は、177組の中年期夫婦を対象に調査を行い、夫婦関係の質に対する自己評価と夫婦の会話時間の関係を検討した。そして、会話時間は夫妻による夫婦関係の質に対する評価のギャップと有意に相関すること、妻においてのみ夫婦関係の質に対する評価と会話時間が正の相関を持つことなどを示した。

母子関係に関する研究

母子関係を扱っている研究は、1篇見られた。

北村・無藤（2003）は、中年期にある母親を対象に研究を行い、中年期にある母親の適応状態と成人の娘との関係との関連の仕方や程度には娘の婚姻状態や母親の就業状態によって違いが見られることなどを見出した。

C. まとめ

以上が、国内の中年期夫婦関係研究の動向である。これらの研究から示された結果は、大きく4つのテーマに分けた上で、次のような命題にまとめることが出来るだろう。

中年期の心理学的特性

中年期は夫婦にとって、あるいは中年期夫婦の家族全体にとっての大きな転換期である。個人ライフサイクルの観点からは、心理学的特性として、アイデンティティの成熟や自己概念の構造の変容などが挙げられる。また、家族ライフサイクルの観点からは、重要なイベントの一つとしては、「子の巣立ち」が挙げられる。これらは相互に独立していない点に留意すべきである。

- 子の巣立ちは、母親のアイデンティティの発達に影響を及ぼす。
- 中年期のアイデンティティ課題には、青年期のそれとは異なる独自のプロセスが含まれており、アイデンティティ概念の新しい定義が必要である。また、アイデンティティの成熟については、様々な在り方が示唆されている。
- 中年期の心理社会的発達には、「達成」「適応」の自己概念の構造が関連している。
- 中年期の時間的展望は、40代、50代、60代で量的及び質的に変容していく。

中年期夫婦の性差

中年期の夫妻は、個人ライフサイクル上では同一段階に位置付けられるにも関わらず、次の変数において性差が認められる。

- 中年期の自己概念の構造には、性差が認められる。
- 孤独感については、夫妻間で質的な差異が認められる。
- 情緒的ケアは、夫妻間で非対称的である。妻から夫への情緒的ケア遂行度は、夫から妻への情緒的ケア遂行度より高い。
- 夫婦間コミュニケーション態度には、性差が認められる。
- 夫婦関係の質に対する評価と会話時間の相関には、性差が認められる。

社会経済的変数のよる影響

中年期夫婦においては、妻の社会経済的状態によって、コミュニケーション・パターンや情緒的ケアといった夫婦間相互作用の様相が異なってくる。

- 妻の経済的地位が高い程、夫は妻に対して共感的なコミュニケーション態度を取る。
- 妻の社会経済的資源へのアクセスが、夫婦の情緒的ケア関係の相互性・互恵性を保証する。
- 職業生活が夫婦関係と心理的健康に及ぼすスピロオーバー/クロスオーバーな影響は、妻の就業形態と収入、夫の分業観によって異なる。
- 夫婦の経済生活は、夫婦間コミュニケーション・パターンに影響を及ぼす。

個人化の影響

現代における「個人化傾向」は、個人の心理学的変数に影響を及ぼしていると考えられる。このことは、中年期夫婦の妻を対象とした研究から明らかにされつつある。また、妻の社会経済的資源へのアクセスは、中年期夫婦を含む家族における「個人化」を促進させている。

- 女性の高学歴化・有職化から、母親は個人としての生き方に時間資源を配分することが可能になった。
- 中年期の母親の家族観は、「一体感」「個人領域」の2軸から構成される。さらに、家族観は時間や心的エネルギーといった資源の配分の様相と関連している。
- 行動次元の個人化傾向は孤独感に影響しない一方で、意識次元の個人化傾向は孤独感に影響する。

D. 中年期夫婦関係研究の課題

さて、これらの研究の展望を通して、中年期夫婦関係研究を進めていく際に留意すべき課題が浮かび上がってきた。ここでは、3つの課題について言及したい。

第一に、中年期の定義の問題がある。先行研究においては、文化の違いなどをふまえた結果、欧米圏における研究とは定義を異にしている。具体的には、45-60歳前後を中年期とする定義が妥当であるとしている研究が多く見られる。しかし、この中年期を前期・後期の二期に分けて捉えようとする研究が幾つか見られており(e.g. 日潟・岡本(2008))、それらの研究からは中年期前期と中年期後期の間に認められる質的な差異が浮き彫りにされ始めている。このことから、中年期の定義を広く定め、包括的な理解を目指すことが重要である一方で、中年期は前期・後期に分けて捉えることの重要性が示唆される。

第二に、研究対象が限られている問題がある。中年期を対象とした研究の多くは個人の変数を対象としており、とりわけ妻のみを対象としている研究が目立っている。中年期夫婦の包括的な理解を目指すには、個人の理解を目指すことに加え、二者関係システムの理解、家族システムの理解が必要である。すなわち、妻のみを対象とした研究だけでは不足であり、夫を対象とした研究、夫妻を対象とした研究、家族全体を対象とした研究がそれぞれ蓄積される必要がある。さらには、母子関係、父子関係と言った二者関係を扱うことも重要となるだろう。

特に、夫個人の心理学的側面の理解を目指した研究は妻のそれに比べ極めて少ない点は強調して指摘しておきたい。夫婦関係の文脈に位置付けた中年期個人の理解を目指す際に、妻側の視点から女性個人の心理学的特性に迫ることは重要である。しかし、同様に、夫側の視点から男性個人の心理学的特性の理解を目指すこと、さらには、それらの相違を明らかにすることは、中年期夫婦の理解を目指すためには必要不可欠である。

第三に、上述の研究対象の問題とも関連するが、研究に特定の心理学研究法が用いられている問題がある。我が国における中年期夫婦関係研究の殆どは、自己報告法を用いている。この方法が有用な研究方法であることはいうまでも無い。だが、様々な研究方法の中で、自己報告法がもっとも優れた研究方法であるとするのは誤りであろう。収集されたデータへのバイアス、倫理的な問題、研究目的との整合性などを考慮すると、ど

のような研究方法であれ、それぞれ特有の長所と短所がある。したがって、中年期夫婦関係研究をさらに進めるためには、自己報告法のみを採用するのではなく、後述する仲間報告法や観察法なども用いる必要があるだろう。

研究方法をどのように選択するかという問題は、どのような現象に研究者が関心を寄せるかという点にも大きく関わっている。例えば、これまで行なわれてきた中年期夫婦関係研究においては、夫婦間で生起している交互作用に焦点を当てている研究は少ない。稲葉(2002)は、夫婦間のクロスオーバーを明確に扱った研究は無いと指摘しているが、2009年においても、この状況は依然、あまり変わっていない。夫婦間の交互作用について研究を行う際には、自己報告法と仲間報告法、観察法などを組み合わせた研究が役立つかも知れない。

さて、中年期夫婦関係研究がこのような状況にある理由の一つには、夫婦の相互依存性や夫婦間の交互作用を捉えるために必要な心理学研究法の発展が遅れていることが挙げられる。これに対し、近年、夫婦間の相互依存性や交互作用を理解するために必要な心理学研究法および心理統計学的手法が開発されつつある。今後の中年期夫婦関係研究において、これらが有用となることは言うまでも無いだろう。

3. システムの視点を導入する

そこで、中年期夫婦関係研究を進めるのに役立つと思われる心理学研究法について、詳しく取り上げる。

中年期夫婦関係の理解を目指す際には、個人(e.g. 夫、妻)を単位とした理解、二者関係(e.g. 夫婦関係、親子関係)を単位とした理解、そして家族全体を単位とした理解のそれぞれを組み合わせて、複合的に捉えることが重要である。このことは、心理学研究法にシステムの視点を取り入れる、というように表現出来るだろう。

心理学の研究は、パーソナリティや生物学的変数といった個人変数と個人の行動の連関を検討する研究から、個人変数と個人の関係的経験や結果(e.g. 離婚)の連関を検討する研究へと変遷していった(Reis, Collins, & Berscheid, 2000)。個人の関係的経験や結果を変数として扱うことは、心理学領域において関係を踏まえた変数間の関連を明らかにするやり方の一つとして重要である。しかし、これらの方法は、十全にシステムの視点を取り入れることに成功しているとは言

えないだろう。

これについて、近年、システムの視点を導入するための方法が幾つか提唱されている。ここでは、中年期夫婦関係研究を行うに当たって有用であると考えられる、心理学研究法及びペアワイズ・アプローチと称される統計学的手法について言及する。

A 様々な心理学研究法

自己報告法

もっともよく用いられている研究法は、自己報告法である。自己報告法には、質問紙研究、対面による面接あるいは電話による面接研究、日記や記述を用いた研究、相互作用記録を用いた研究、書簡研究がある。

相互作用記録を用いた研究について、補足しておく。この研究法は、相互作用が起こった日の時間、それがどれくらい続いたか、相互作用の相手は誰か、その他の項目について、標準化された形式で記述するものである。ロチェスター相互作用記録(Rochester Interaction Record: RIR)や、アイオワ・コミュニケーション記録(Iowa Communication Record: ICR)などがあり、RIRは孤独感の研究(Wheeler, Rei, & Nezlek, 1983)などに、ICRは相互作用相手に生じる会話に焦点を当てた研究(Duck, Pond, & Leatham, 1991)などにそれぞれ用いられている。

仲間報告法

仲間報告法は、情報提供者が面識ある人々の関係について、口頭による、或いは記述によるデータを提供する研究法である。「間主観的な反応が一致することは、研究の対象となるような関係の現象を指し示している」という仮定に基づいているため、仲間報告研究は、情報提供者や研究者の間で共有された、間主観的な反応に焦点を合わせる傾向がある。仲間報告法は、自己報告法と同様に、質問紙研究や面接研究などの形態を取る。

これまで、仲間報告法を用いた研究は殆ど見当たらないが、次に取り上げる観察法と組み合わせることによって、特別な価値のある知見をもたらすことが出来る。

観察法

仲間報告法による研究は、知人である観察者によってなされる、口頭による、或いは記述された報告である。そこで報告される内容は、関係者やその関係の文

脈に関する理解に基づいている。これに対し、観察法による研究で用いられるのは、関係者や関係の文脈に対する事前の知識を一切持ち合わせていない、訓練された評定者によってなされる記録である。

観察法によって研究される関係は様々である (Ickes & Tooke, 1988)。また、観察され記録される行動の範囲も非常に広く、表情などの非言語的行動、会話のピッチなど言語外の行動、示唆を与えるなどの言語行動などがある。葛藤時に示されるネガティブな感情の応酬といった、より広範囲にわたる行動パターン (Gottman, 1979) が観察されることもある。

生活出来事公文書法

公文書資料によって公的に利用可能な生活出来事データを用いた研究が、生活出来事公文書法である。Trovato (1986, 1987), Trovato & Lauris (1989) は、離婚と自殺との関係について、公文書を用いた研究を行い、離婚が自殺率に重大な影響を及ぼすことを見出した。

公文書法は、被験者の研究者に対する反応にバイアスがかからないという利点がある。

実験法

関係を扱う研究における実験法では、ある独立変数の水準の変化に対応して、従属変数の水準に変化が観察されるかどうかを検討する。

独立変数の操作によって、異なったタイプの関係現象 (e.g. 相互作用方略) が観察されるかどうかを検討する、というようにして、この研究法は関係研究に適用される。

生理学的方法

生理学的方法とは、心拍数、皮膚電気伝導などの生理的反応を用いる研究である。例えば、次のような研究例がある。Levenson & Gottman (1983, 1985) は、調査協力者に対し、葛藤を引き起こす問題について議論をするように求め、議論中の生理的反応をモニターした。さらに、3年の期間を経て、結婚満足度を評価した。その結果、議論中の夫の心拍数と、3年後における結婚満足度の低減の相関関係を見出した。

折衷的方法

これまで取り上げてきた研究法は、どれも一長一短であり、一概にどれが優れているのかを評価することは出来ない。そこで、2つ或いはそれ以上の研究法を

組み合わせる、折衷的方法が主流になりつつある。折衷的方法を用いることは、それぞれの研究法の利点を生かし、弱点を補うことを可能にする。

折衷的方法の具体的研究例としては、Ickes et al. (1990) による2者間相互作用パラダイム the Dyadic Interaction Paradigm などがある。

B ペアワイズ・アプローチ

システムの視点を導入するためには、これまで取り上げてきた心理学研究法に加え、適切な分析方法を用いたデータ処理が必要である。ここでは、近年発表された (Gonzalez & Griffin, 2002; Gonzalez & Griffin, 1999; Gonzalez & Griffin, 2000; Gonzalez & Griffin, 2001; Griffin & Gonzalez, 1995) ペアワイズ・アプローチについて、簡単に取り扱う。これは、二者間データを分析するための手法である。

なお、ここではペアワイズ・アプローチについて詳述するだけの紙面がないため、ペアワイズ・アプローチが有している問題意識と、それを用いることの利点にのみ言及する。具体的な手続きについては、Gonzalez & Griffin (2002) などの他、清水・大坊 (2007)、清水 (2006) などに詳しいので、そちらを参考にされたい。

まず、二者関係という文脈で2変数間の線形関係を評価する際に、研究者が避けるべき誤りについて取り上げる。

四つのエラー

第一に、仮定された独立性のエラーと呼ばれる問題がある。研究者は、 N 組の調査協力者から得られた $2N$ 個のデータについて、それらのデータが独立であるかのように相関を求めることがある。 N 組の調査協力者はある特別の関係 (e.g. 夫婦関係) にあるため、 $2N$ 個のデータについては独立性が保証されない。したがって、この手続きが誤りであることは自明である。

第二に、削除のエラーと呼ばれる問題がある。サンプルの独立性を確保するために、サンプルの半数を捨ててしまうことによる問題である。サンプルの独立性が相関関係に及ぼす影響は、サンプルの半数を捨てることによって回避出来る。しかし、サンプルを捨てることは無駄である上、二者関係における相互依存性の評価を不可能にしてしまう。

第三に、レベル横断のエラーと呼ばれる問題がある。これは、ある水準の集合を別の集合へと一般化する傾向を意味する。2変数について、それぞれ二者関

係の平均を作り出し、その平均値間の相関を算出し、それを個人における2変数間の相関と解釈する誤りのことである。それぞれの変数における、二者関係内の相互依存性の程度に応じて、二者の平均値間の相関は、個人得点から算出される相関とは大きく異なる場合がある。

第四に、分析レベルのエラーと呼ばれる問題がある。二者の平均値間の相関を、『二者関係レベルのプロセス』を表すものと解釈する誤りである。同様に、個人得点間の相関が、『個人レベルのプロセス』を表すものと解釈するの誤りである。

今回の展望の対象となった論文の中では唯一、伊藤・相良・池田(2006)が、夫婦の一方に生じた事象が他方に影響を及ぼすこと、すなわち「クロスオーバー効果」について取り扱っている。この研究は、夫婦間の交互作用の一側面を明らかにしている点で重要である。しかし、 X_H が Y_W に及ぼす影響のような「クロスオーバー効果」について、『二者関係レベルのプロセス』をふまえず、『個人レベルのプロセス』として捉えている点は問題であろう。二者関係レベルと個人レベルの相関を分離するためには、分析の各レベルにおける変数内及び変数間の相互依存性の程度を同定しモデル化するようなアプローチを必要とする。

ペアワイズ・アプローチ

ここまで、研究者が避けるべき四つのエラーについて述べてきた。これらの問題を回避するための方法が、ペアワイズ・アプローチと呼ばれる手法である。

ペアワイズ・アプローチでは、(a)二者関係レベルと個人レベルの両方についての疑問を同時に扱うことが出来、(b)二者関係のメンバー両方からのデータを使用することが出来、(c)二者関係メンバーの反応における相互依存性の程度に応じて適切に調整された方法で、相関や回帰に関する有意性検定を行うことが可能となる。

C まとめ

以上、中年期夫婦関係研究に取り入れるのが好ましいと思われる、心理学研究法及びペアワイズ・アプローチにつれて述べた。

本稿の主な目的は、中年期夫婦関係研究の展望を行うことと、展望を通して今後の課題を検討することであった。中年期夫婦関係研究の展望からは、次のようなことが見出された。

これまで、心理学領域における中年期夫婦関係研究については、その数が少ないことが指摘されてきた(e.g. 東原, 2003)が、目下、その数は増えつつあり、研究者の関心が寄せられていることが示された。

2000年以降の研究としては、アイデンティティや自己概念、時間的展望といったテーマを扱った心理学的特徴に関する研究がもっとも多く、他には社会的・文化的背景に関する研究、情緒的關係に関する研究、コミュニケーションに関する研究、母子関係に関する研究が行なわれた。これらの研究から見出された知見は、中年期の心理学的特性、中年期夫婦の性差、社会経済的変数による影響、個人化の影響といった4つのテーマにまとめられた。

本稿では論じていないが、中年期夫婦関係をさらに進めるためには、これらの研究をさらに蓄積する必要があることは言うまでも無い。例えば、同一性・アイデンティティに関する研究からは、中年期のアイデンティティは青年期のそれと同じように扱うことは出来ない側面があるため、アイデンティティ概念の新しい定義が必要である、という指摘があった。個人ライフサイクル上の段階に応じてアイデンティティ概念を定義するという発想をもたらした点で重要であると考えられ、研究者はこの指摘に応える必要があるだろう。このように、今回展望の対象となった論文の『延長線上』の研究をさらに進めることが求められている。

一方で、システムの視点を取り入れること、すなわち、システムズ・アプローチの観点から指摘出来る今後の課題として、中年期夫婦関係研究においてはシステムの視点を導入する必要があること、そのための方法としては様々な心理学研究法やペアワイズ・アプローチが有用であることが論じられた。

今後、これらをふまえた中年期夫婦関係研究の蓄積が期待される。

(指導教員 中釜洋子教授)

主要引用文献

- Gonzalez, R., & Griffin, D. (2002) Modeling the Personality of Dyads and Groups. *Journal of Personality*, 70, 901-924.
- 日渦淳子・岡本祐子 (2008) 中年期の時間的展望と精神的健康との関連：40歳代、50歳代、60歳代の年代別による検討。発達心理学研究, 19, 144-156.
- 平山順子・柏木恵子 (2001) 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？. 発達心理学研究, 12, 216-227.2001
- 平山順子 (2002) 中年期夫婦の情緒的關係—妻から見た情緒的ケアの夫婦間対称性. 家族心理学研究, 16, 81-94.
- 平山順子・柏木恵子 (2004) 中年期夫婦のコミュニケーション・パ

- ターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連. 発達心理学研究, 15, 89-100.
- 廣田靖子 (2009) 成人期男性のアイデンティティの捉えなおしの様相とその規定要因の検討. 心理臨床学研究, 26, 687-697.
- 井上清美 (2001) 家族内部における孤独感と個人化傾向—中年期夫婦に対する調査データから. 家族社会学研究, 237-246.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2006) 職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討. 発達心理学研究, 17, 62-72.
- 北村琴美・無藤隆 (2003) 中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連. 心理学研究, 74, 9-18.
- 丸島令子 (2000) 中年期の「生殖性(Generativity)」の発達と自己概念との関連性について. 教育心理学研究, 48, 52-62
- 森川早苗 (2000) 子供のいない女性の同一性の研究—中年期の同一性地位に関する一考察. 家族心理学研究, 14, 1-13.
- 永久ひさ子・柏木恵子 (2001) 中年期の母親における「個人としての生き方」への態度. 発達研究, 16, 69-85.
- 長津美代子 (2007) 中年期における夫婦関係の研究——個人化・個別化・統合の視点から 日本評論社.
- 難波淳子 (2000) 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察：語られたライフヒストリーの分析から. 社会心理学研究, 15, 164-177.
- Reis, H., Collins, W. A., & Berscheid, E. (2000) The Relationship Context of Human Behavior and Development. *Psychological Bulletin*, 126, 6, 844-872.
- 清水紀子 (2004) 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ. 発達心理学研究, 15, 52-64.
- 清水紀子 (2008) 中年期のアイデンティティ発達研究：アイデンティティ・ステイタス研究の限界と今後の展望. 発達心理学研究, 19, 305-315.
- 土倉玲子 (2005) 中年期夫婦における評価ギャップと会話時間. 社会心理学研究, 21, 79-90.
- 東原麻奈美 (2003) 中年期女性のアイデンティティ研究に関する一考察 —結婚・夫婦関係を中心に— 東京大学大学院教育学研究科紀要 43, 165-173.
- 若本純子・無藤隆 (2004) 中年期の多次元的自己概念における発達の特徴：自己に対する関心と評価の交互作用という観点から. 教育心理学研究, 52, 382-391.
- 若本純子 (2007) 中高年期の自己評価における発達の特徴：自尊心との関連, および領域間の関連に注目して. パーソナリティ研究, 16, 1-12.